

性的指向による健康格差と HIV 感染の脆弱性

日高庸晴

関西看護医療大学看護学部看護学科

● 要約 ●

疫学の担う主たる役割は、生活習慣などの個人的要因や居住環境などの環境的要因、体質などの遺伝的要因が健康に与える影響を明らかにすることである。加えて、今日では社会的、経済的、文化的、心理的要因が人々の健康問題に関与していることをも明らかにするようになってきている。

1980年代以降に疫学の射程に入った HIV 感染症だが、わが国ではゲイ・バイセクシュアル男性におけるその感染拡大が著しい。しかしながら同集団の HIV 感染リスク行動やそれに関連するメンタルヘルスや社会的スティグマの現状を明らかにする研究はこれまでほとんど実地されていない。数少ない先行研究によれば、同集団の抱え持つ問題として、学校教育現場でのいじめ被害や自殺未遂割合の高さ、異性愛者を装うことによるストレスやそれに起因する抑うつ、不安、孤独感の高さやセルフエスティームの低さがあることが明らかになっている。

本稿ではゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 予防対策に資するために、HIV 感染の脆弱性が高くその影響を強く受けているゲイ・バイセクシュアル男性の抱える心理・社会的問題と、その支援策について大規模な疫学研究による実証データを交えて考察する。

● Key words : HIV 感染症, HIV 感染の脆弱性, 性的指向